

9月1日「御言葉を行う者になりなさい！」ヤコブ1:19~27、ルカ13:10~17

今日一緒にお聞きしたヤコブ書は、今から500年くらい前、宗教改革の時代に話題になった書です。宗教改革者ルターはヤコブ書を「わらの書」（つまり全く役に立たない）とまで言いました。どうしてか？今日のお聞きした通り、この書が「行い」を非常に重視するからです。「22節 御言葉を行う者になりなさい。自分を欺いて、聞くだけで終わる者になってはいけません。」さらに読み進めていくと、「2:14 わたしの兄弟たち、自分は信仰を持っていると言う者がいても、行いが伴わなければ、何の役に立つでしょうか。」と行いの伴わない信仰には意味がないとさえ言ってしまいます。これは、「私たちは信仰によって救われている」というパウロの教えと真っ向から対立するようにも思えます。信仰義認を訴えたルターからすれば、無意味な書に思えたのです。では、ルターがいうようにヤコブ書は焼いて捨てても構わない価値のない書物なののでしょうか？私はそうとは思いません。信仰と行い、これは私たちを悩ませ続ける一つのテーゼであろうかと思えます。今日はそんなことを考えてみたいと思います。

世界中を見渡せば数多くの宗教があり、救いの説き方も様々です。善い行いをすれば救われます、というものもあれば、四国の88箇所のお遍路さんのように、巡礼をすれば救われるというところもあり、中には「~万円の壺を買えば救われますよ」なんていかかわしいものまで・・・では、キリスト教ではどうか？「ローマ3:23~24 人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。」イエス様が私たちに代わって十字架にかかって、いのちを献げてくださった、だから私たちの罪は赦されて救われています。キリストの贖い（借金から買い戻すこと）とも言います。後は、私たちがこの出来事を信じるか、イエスを救い主だと信じるのかどうか、です。つまり、キリスト教の救いに私たちの行いとかが支払ったお金とかは一切関係ありません。私たちはただイエス・キリストへの信仰によって救われているのです。

ヤコブ書を批判したルターの時代には、この聖書の教えが、あろうことか教会によって捻じ曲げられていました。贖宥状というお札を購入すれば、つまりお金を支払えば魂が救われると教え、ドイツの貧しい人々から、イタリアのサンピエトロ大聖堂を建設するための費用をまきあげていたのです。ルターはそのことに怒り、声を挙げ、改革を行ったのでした。ルターの改革にはそういう背景がありましたので、信仰による救いを強調したのはあたり前です。そんなルターから見れば、「行い」に焦点を当てるヤコブ書はまるで、信仰による救いと反対のことを教える書物に思えたでしょう。

また、行いの強調は他の弊害も生み出すかと思えます。あまりに行いを強調すると、

救いを自分の手で勝ち取っているように錯覚してしまいます。まるで自分が偉いから、自分自身が正しいから救われていると思ってしまうのです。今日はもう一箇所ルカ福音書を読みました。イエス様が安息日に腰の曲がった女性を癒されると、周りで見えていたユダヤ教の指導者たちは「律法違反だ！」と責めたのです。確かに、安息日には安息するように定められていましたが、それでも必要なこと、例えば最低限、歩いたり、食事をしたり、家畜の世話をすることは認められています。「18年間も苦しんでいた女性が癒されることはなおさらではないか!？」とイエス様は言われるのです。指導者たちは自分たちが、律法を守って生きていることに誇りを持っていました。それは良いのですが、自身の行いのゆえに傲慢になり、他者の苦しみや痛みには無関心になり、一人の女性が痛みから解放されることを喜ぶよりも、自分たちの守っている決まりを逸脱されることの方に怒ったのです。指導者たちは救いが神さまから与えられるものだとということのを忘れ、自らの行いによるものだと錯覚していたのです。イエス様はその偽善を鋭く見抜かれるのです！

確かに行いの強調は、色々な弊害をもたらします。私たちはイエス・キリストへの信仰によって救われている、その最も大きな福音を見逃しかねません。イエス様と対立した人々のように自己を行動によって正当化し、他者を裁くようにもなってしまいます。救いは何処から来るのか？天地を造られた神さまから来るのです。そのことを忘れてしまうのです。私たちはどこまでも自らの行いに対して謙虚にならなければなりません。

と、ここまで、行為を強調することに注意を払いました！ですが、では、私たちは信仰によって救われているのだから、開き直って、どんな生活を送っても良いのでしょうか？たとえば、自堕落な生活を送っても？例えば、犯罪や悪事に加担しても信仰があれば大丈夫なのでしょうか？もちろんそうはならないと思います！どうやら、ヤコブ書はそういうことを言いたかったようなのです！ヤコブ書はパウロの福音を否定したのではなくて、パウロの教えを曲解してあまりにも無責任な行動をとる人たちを批判して書かれたようなのです。続く2章には、教会のなかで富を持つ人が優遇され、貧しい人が酷い扱いを受けていることを批判しています。また、こうもあります。「**2:15~16** もし、兄弟あるいは姉妹が、着る物もなく、その日の食べ物にも事欠いているとき、あなたがたのだれかが、彼らに、『安心して行きなさい。温まりなさい。満腹するまで食べなさい』と言うだけで、体に必要なものを何一つ与えないなら、何の役に立つでしょう。」

今日の聖書日課で旧約から選ばれていたのはアモスという預言者の言葉でした。アモスは北イスラエルで預言した人物ですが、彼の時代、イスラエルの国は大変栄え、お金持ちは象牙のベッドで休み、豪華な切り石の家に住んでいたそうです。一方で貧富の格

差は大きくなり、貧しい者たちは靴一足の値で売り買いされ、街の門での裁判では金持ちに優位な判決がなされます。社会から正義と公正さが失われ、最も大切な愛が欠如していたのです。アモスはそのようなイスラエルの国を批判しました。そして、そんな状態で金持ちたちによって盛大に行われる神殿の礼拝や祈りが神に聞き届けられることはない、いずれ破滅するだろうと裁きを語ったのです。「**正義を洪水のように、恵みの業を大河のように尽きることなく流れさせよ！**」これが唯一、イスラエルの国が裁きを免れる道だと説きました。

アモスは、イスラエルの民は、神から選ばれた民、救われた者たちなのだから、むしろ大きな責任を持つといます。その社会を神の愛と正義で満たす責任です。神さまはそれゆえ、イスラエルの民がもし救われた歴史を忘れ、罪を犯し、その社会が悪で染まるならばどの民よりも一層厳しい裁きをくだされる、と告げたのです。これは、私たちキリスト者も同じことが言えるのではないのでしょうか？私たちはイエス様から救われていることを知っています。そのことを自らの行為によって正当化したり、誇ることはおかしいですが、しかし、キリストからの救いを頂いているからこそ、私たちはより良い生き方を追い求める責任があるのではないのでしょうか？そのことをパウロは「キリストを着る」と表現していると思います。コロサイ書 3：5、9～10

「だから、地上的なもの、すなわち、みだらな行い、不潔な行い、情欲、悪い欲望、および食欲を捨て去りなさい。古い人をその行いと共に脱ぎ捨て、造り主の姿に倣う新しい人を身に着け、日々新たにされて、真の知識に達するのです。」

私たちはキリストから愛され、罪を赦されて、救われている。私たちは新しくされているのです。だからこそ、私たちはこれまでのような生き方を脱ぎ捨てて新しい歩みを始めるのです！これまでに自分一人では出来なかった道をイエス様と共に、イエス様を身につけて歩み出すのです。

今年出版されて、私が気になっていた本の中に『赦された者として赦す』があります。私は涙が止まりませんでした。アメリカのデューク大学の神学部の研究の成果が出版されたものですが、本当に現代の世界が抱える課題にキリスト者としてどう関わるのか、考えさせられます。著者の一人であるセレスティンはアフリカのルワンダ出身の牧師です。ルワンダではフツ族とツチ族という 2 つの部族の間で内戦が起り、1994 年 4 月からたった 100 日の間に 100 万人もの人々が虐殺されました。その後も 1998 年まで内戦は続き、多くの犠牲者を出し、国は荒れ果ててボロボロになりました。セレスティンはそのアフリカで ALARM (アフリカにおけるリーダーシップと和解のミニストリー) という働きを始め、互いに争い合った部族間の関係の修復と和解のために尽力しました。

彼は和解の働きの過程で、自分の生まれ育った故郷を襲い、父親と親戚、友人や仲間たちを殺した者たちの親戚に出会いました。セレスティンはそのことを通して神さまから「お前は自分がこれまで語った通りに生きるのか、それともそれらの言葉を嘘にするのか、激しく問われた」と語ります。そしてセレスティンは、彼の愛する者たちを虐殺した者たちの家族に彼らを恨んだことを謝罪し、罪を告白し、赦しを乞う道を選ぶのです。彼は、赦され、彼自身も、愛する者たちを殺した者たちを赦すことが出来たと語ります。セレスティンは驚くことに、生き残った自分の母親の世話を、自分の村を襲った者たちの親戚に預けたのです。どうしてセレスティンはそのような「赦し」へと促されたのか・・・こう語っています。

「私たちは皆、初心者なのです。キリストにある新しいいのちに生きようと、弱々しい一歩を踏み出すとき、私たちは躓いてしまいがちなのです。しかし、キリストにしっかりと目を留めるとき、私たちは、私たちを赦してくださった方によって、自分の能力を超えて赦すことができる者へと変えられていくのです。」(セレスティン・ムセクラ『赦された者として赦す』69頁)

私は、私たちがキリスト者である意味はここにあると思います。私たちは洗礼を受け、キリスト者となります。それは私たちが特別偉いからでも、何か能力があるからでもありません。私たちは、神さまの御心を行う者として選ばれているのです！私たちは自分だけでは弱く、罪深い者ですが、キリストに出会い、キリストの愛を知り、キリストに赦されて初めて、自分の能力を超えたところで人を愛し、人を赦し、人に仕えることができるようになるのです。そういう意味で私たちの行いは意味を持つと思います。私たちの行いは御言葉によって変えられなければならないのです！

もちろんセレスティンのように偉大な働きが出来るか私には分かりません。けれども、私たちが本当に真剣に御言葉に聴き、恵みを受け取り、そして新しくされていくなれば、きっと私たちの生き方は本当に変わっていくでしょう。私たちが真剣に新しい道を求めるならばきっと神さまは備えてくださるはずです。イエス様もこんな風に言われるのです。マタイ 7:24～27「そこで、わたしのこれらの言葉を聞いて行う者は皆、岩の上に自分の家を建てた賢い人に似ている。雨が降り、川があふれ、風が吹いてその家を襲っても、倒れなかった。岩を土台としていたからである。わたしのこれらの言葉を聞くだけで行わない者は皆、砂の上に家を建てた愚かな人に似ている。雨が降り、川があふれ、風が吹いてその家に襲いかかると、倒れて、その倒れ方がひどかった。」共にイエスの招かれる新しい生き方へと歩みを進めていきましょう！